

へいあんきゅう だいにないかくかいろうあと りんせつち 平安宮 内裏内郭回廊跡 隣接地

調査期間：令和7年4月9日（水）～ 5月2日（金）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

1 はじめに

調査地は上京区下立売通千本東入田中町432に所在し、土屋町通と下立売通の交差点の南西にある史跡平安宮跡内裏跡・朝堂院跡・豊楽院跡の西側に位置します（図1）。そして平安宮内裏の南西隅（内郭回廊と外郭築地の間）にあたります（図2）。このため今回の調査では、内裏内の通路の利用状況や、調査地近辺で確認されている罹災及び造営状況の確認を主な目的として調査を行いました。

2 この場所について

今回の調査対象である内裏は、平安宮の中央やや東寄りに位置します。宮内の諸施設の中で早くに造営が進み、桓武天皇が遷御した延暦13年（794）には完成していたとされる施設です。陽明文庫などに伝わる「内裏図」によると、内裏には紫宸殿や仁寿殿、常寧殿などの天皇の居住施設が置かれており、これら施設の周囲を、「内郭回廊」と「外郭築地」の廊下や塀で、二重に取り囲む構造になっています。今回の調査地はこの内郭回廊と外郭築地に挟まれた空閑地（道路部分？）にあたります。

内裏焼亡！

内裏は宮の中でも早い段階に完成していたとされる施設ですが、その長い歴史の中で、大きな事件といえば、天徳4年（960）に内裏の東側にある宣陽門付近からの出火によって、温明殿や宣陽殿をはじめ、内裏がほぼ全焼してしまったことが挙げられます。それまでに、応天門や大極殿が焼亡したことはあったものの、内裏全体に及ぶような大きな火災は、この火災が初めてのことでした。その後すぐに内裏の新造工事が行われ、翌年（961）には再建されましたが、これ以後、安貞元年（1227）の焼亡までに、十数回にわたり罹災と再建が繰り返されます。当初、



図1 調査地位置図 (1/4,000)

内裏の再建は被災後概ね2年以内に行われていましたが、天喜6年（1058）の焼亡以降、再建には10年以上の長い年月が必要とされるようになります。内裏は安貞元年（1227）に焼亡した後、再建されることなく、政治的機能をほとんど果たさなくなってしまう。

「内裏」から「内野」へ

鎌倉時代以降はあまり利用されず、内裏周辺は「内野」と呼ばれる大きな空閑地として存在し続けました。その後、天正14年（1586）に豊臣秀吉がこの辺りに聚楽第を築城すると、その周辺に大名屋敷や町家が集められ、城下町が形成されます。ただし、調査地周辺の土地利用が活発になるのは江戸時代以降になります。江戸時代初頭に下立売通や出水通が延伸され、江戸時代前半までには下立売通沿いに町家が成立し、さらに江戸時代半ばから後半にかけては下立売通を起点に南北に千本通が延伸されたことで、江戸時代半ば以降、千本通沿いにも町家が成立していく様子が、当時の絵図などから読み取ることができます。

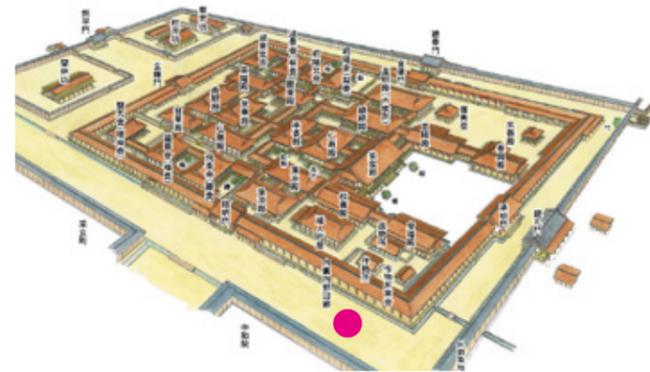


図2 平安宮内裏付近のイラスト
（●のあたりが今回の調査推定地）

3 周辺の発掘調査について

初めて内郭回廊に関する遺構が確認されたのは、昭和38年（1963）に下立売通で行われた下水道工事に伴う立会調査（図3-調査A）です。この調査では凝灰岩の切石と河原石の石列が検出され、この石列が平安宮内裏を囲んでいた内郭西面回廊の一部であることが判明しました。そしてこの石列の南側にあたる場所で、昭和43年（1968）・昭和48年（1973）の2回にわたり、発掘調査を行い（図3-調査B）、調査Aで確認された石列の続きや基壇、雨落溝が検出され、内郭西面回廊の基壇外側部分の状況が明らかとなりました。そしてこの調査で検出された回廊はその重要性から、昭和54年（1979）に国の史跡に指定されています。

昭和62年（1988）、今回の調査地の西側にあたる場所で発掘調査が行われ（図3-調査C）、平安時代の南北方向の溝2条とこの溝に挟まれた築地状の高まり、築地状の高まりの上面に添え柱痕跡と考えられる柱穴が確認されています。この築地状の高まりの検出位置と調査A・Bで確認された内郭回廊の基壇との位置関係から、調査Cで見つかった遺構は、外郭築地（及び中和院の東築地）であると考えられます。さらに溝の埋土には10世紀後半と考えられる土器や瓦、炭化物、焼土、壁材片などが含まれていました。

平成6年（1994年）には、調査Aで確認した凝灰岩列の北側にあたる場所で発掘調査が行われています（図3-

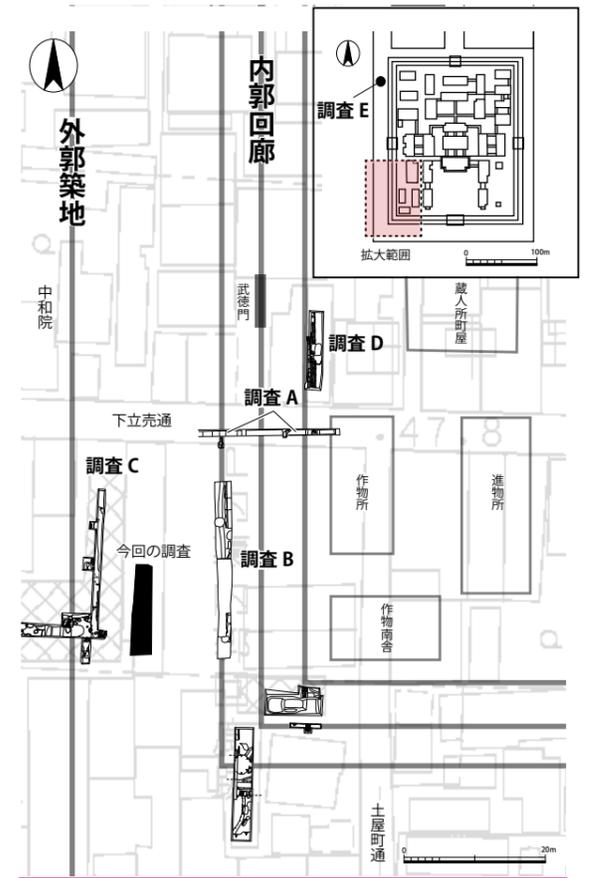


図3 今回の調査と周辺の発掘調査位置 (1/5,000)

調査D)。この調査では2列の石列と回廊基壇の一部と考えられる盛土が検出され、その下では地覆石列と雨落溝の一部を検出しており、新旧2時期の内郭西面回廊の東側の一部が確認されました。層序や出土遺物から、古い方は平安宮創建期にさかのぼると考えられ、また修築後の回廊遺構の上部には多量の焼土が確認されており、大規模な火災があったことも明らかとなっています。

また今回の調査地は、内郭回廊と外郭築地に挟まれた通路部分にあたるため、建物などの構築物は想定できません。しかし、内裏の北西隅、内裏内郭回廊と外郭築地に挟まれる通路部分で行われた発掘調査（図3-調査E）では平安時代の土坑が確認されており、その埋土には焼けた壁材片が多量にふくまれていて、火災処理の痕跡が確認されています。

これらの調査成果から、内郭西面回廊は創建時の回廊を修築した後、罹災していることが明らかになりました。また調査Cでは遺構埋土に焼土が、調査Dでは焼土層が確認されており、内裏の焼亡を裏付ける遺構が確認されています。

4 今回の調査について

基本層序は、近現代盛土の下、GL-0.55~-0.7mで小石を多く含む灰黄褐色粘質土、-0.95~-1.2mで整地土と考えられる土器片や瓦片、焼土片が多く混じる灰黄褐色粘質土（整地土）、-1.15~-1.4mで黒褐色シルトの地山になります。遺跡は整地土上面にて遺構検出を行い、土坑9基と整地土を確認しました（図4・6）。調査区の北端で確認した遺構8（土坑）は、南北1.5m以上、東西1.15m以上、深さは1.0mで、埋土には焼土細片が多く混じり、底部あたりに、大きめの瓦片が廃棄されていました（図7）。特質すべきは、遺構9とした整地土です（図5・8・9）。調査区の南半と調査区北壁と東壁沿いの一部で確認しました。この層は大きく上下に分かれ、層の厚みは上層が15~20cm、下層が5~10cmで、南にいくほど厚くなる傾向があります。上層は灰黄褐色粘質土、下層は砂礫混の黒褐色粘質土をベースとし、平安時代中期の瓦や土器の細片が混じります。特に上層には焼土片や焼けた壁材、凝灰岩片、炭化物なども多量に含まれていて、表面は固く締まっています。このような様子から、火災の後片付けの整地土であると考えられます。また後世の削平により部分的にしか確認できませんでしたが、本来この整地土は調査区の全面に広がっていたと考えられ、火災の規模の大きさを窺わせます。

5 まとめ

今回の調査では、平安時代中期の火災処理に伴う整地土や江戸時代の土坑などを確認しました。

これまで調査地付近では天徳4年（960）以後、10世紀後半に内裏は少なくとも4回の火災により修築・再建を繰り返したことが文献史料により明らかとなっています。遺構9（整地土）から出土している遺物の時期は平安時代中期と考えられ、天徳4年（960）から天元5（982）年の間におきた4回の火災後のいずれかの造営に伴う整地土と考えられます。今回の整地土がどの火災に伴う造営に関わるものかは現段階では特定できないものの、内裏の焼亡を裏付ける状況を発掘調査で確認できたことは大きな成果であるといえます。（奥井智子）



図4 遺構検出状況調査区全景（北西から）



図5 調査区全景（北から）

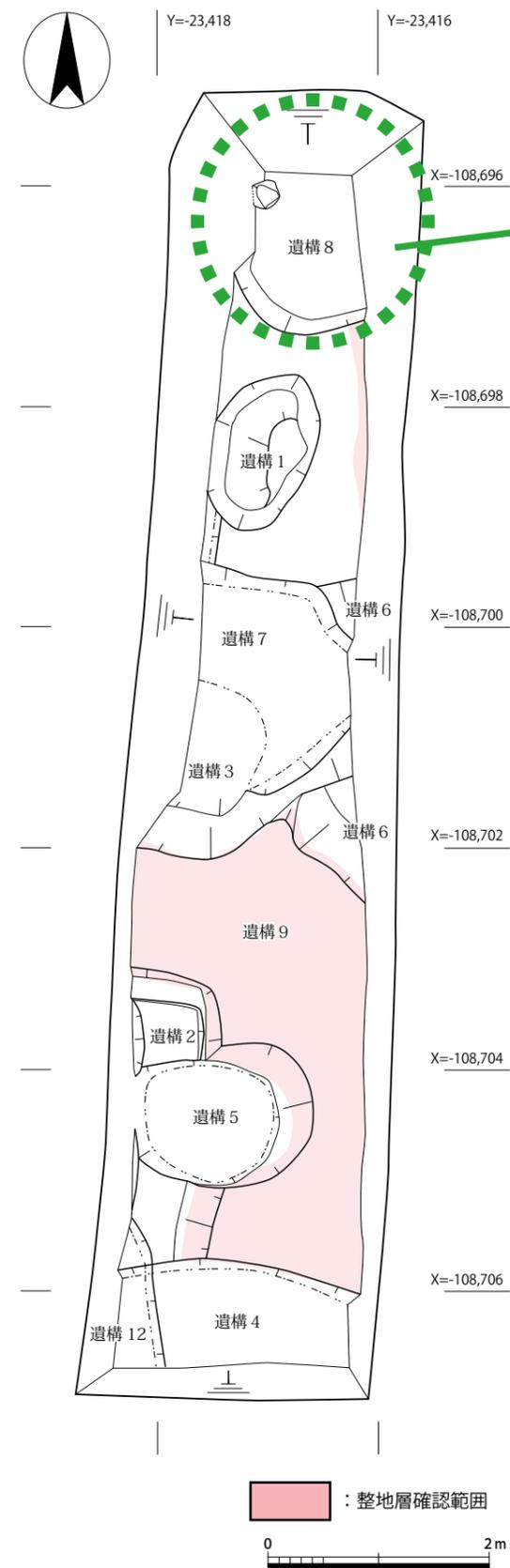


図6 遺構平面図（1/60）



図7 遺構8 遺物出土状況（南東から）



図8 遺構9（整地土）検出状況（北西から）



図9 遺構9（整地土）内に含まれる遺物の様子（北から）